

地域包括ケアシステムにおける薬局・薬剤師の役割 ～多職種連携のなかで薬剤師とどう組むか？～

一般社団法人 日本在宅薬学会 理事長
ファルメデイコ株式会社 代表取締役社長
医療法人嘉健会 思温病院 理事長
狭間研至

高齢化と少子化が同時に進行する我が国で、国民皆保険制度を堅持しながら、世界最高長寿を維持するということは、容易なことではない。ただ、人口動態と疾病構造がどのように変化しつつあるのかということを考えて、その解決に向けた糸口がないわけではないことに気がつく。

高度成長期時代に設計された社会保障システムの限界が見え始めたこともあってか、2013年に厚生労働省は「地域包括ケアシステム」という概念を呈示した。これは、高齢者の尊厳と自立の保持を目的に、住み慣れた場所で最期までその人らしく暮らせるような仕組みを、国を挙げて作っていくというもので、医療・介護を初めとする社会保障の様々な政策は「地域包括ケアシステム」に基づいて遂行される。国を挙げて新しい医療提供体制をとるために、多職種連携・チーム医療の推進は不可欠と考えられるが、薬局・薬剤師がどのような役割を占めるのかということについては、今ひとつすっきりしないという方も多いのではないだろうか。

一方、超高齢社会における医療の「ことがら」のほとんどは薬物治療が占める。認知機能や嚥下機能の低下は、様々な服薬支援を必要とするし、肝機能・腎機能の低下は処方内容の個別最適化を必要とするはずだ。複雑化する薬物治療支援のニーズが飛躍的に拡大するなかで、それを支える医師や看護師数は増大しないのが我が国である。そのような中で、今やコンビニよりも多い薬局や、開業医よりも多い薬局薬剤師が果たす役割は、入院、外来、在宅など全ての医療の分野できわめて重要になるはずである。

しかし、従来通りの処方箋調剤業務を機械的にこなす「モノ」と「情報」の専門家としての薬剤師であるならば、物流システムの改善や調剤業務の機械化、そしてインターネットの発達によってその存在価値は相対的に低下している。また、そのような「対物」業務に専念する薬剤師と、患者さんを良くするという「対人」業務に従事する、医師・看護師・介護スタッフの連携は、うまくいかないことも多い。とはいえ、多剤併用や残薬の問題、さらには、薬剤性の有害事象までも伴うポリファーマシーの問題など、薬剤師との連携が効果的に機能しないために起こっている問題にもしばしば遭遇するようになってきた。

このような状況を打破するためには、薬剤師が、薬を患者さんに渡すまでの仕事から、薬を服用した後の患者さんをチェックすることが重要だということが私の医師としての経験からも明らかになってきた。そして、薬剤師によるいわば前回処方 の妥当性を薬学的に評価し、次回の処方内容の適正化につなげるという医師との協働した薬物治療を行う仕事にシフトすることの意義はきわめて大きい。

本講演では、このような観点から、医師・薬局経営者に加え、薬剤師生涯教育・薬学教育にも携わる立場も踏まえて、今後求められる地域包括ケアシステムにおける地域医療インフラとしての薬局や薬剤師の役割について皆様と一緒に考えてみたい。

【著書】

- ・ 薬剤師 3.0 (薬事日報社)
- ・ 薬局が変われば地域医療が変わる (じほう)
- ・ 薬剤師のためのバイタルサイン (南山堂)
- ・ 薬局 3.0 (薬事日報社)
- ・ 外科医 薬局に帰る (薬局新聞社)
- ・ がんにならないのは、どっち (泰文堂) など

【共著】

- ・ 臨床調剤学 (南山堂)
- ・ 薬物治療学 (化学同人)
- ・ 新 IT 医療革命 (アスキー新書)
- ・ IT が医療を変える (アスキー・メディアワークス) など

狭間 研至 (はざま けんじ) 略歴

平成 7 年大阪大学医学部卒業後、大阪大学医学部附属病院、大阪府立病院 (現 大阪府立急性期・総合医療センター)、宝塚市立病院で外科・呼吸器外科診療に従事。

平成 12 年大阪大学大学院医学系研究科臓器制御外科にて異種移植をテーマとした研究および臨床業務に携わる。平成 16 年同修了後、現職。

医師、医学博士、一般社団法人 日本外科学会 認定登録医。

現在は、地域医療の現場で医師として診療も行うとともに、一般社団法人 薬剤師あゆみの会・一般社団法人 日本在宅薬学会の理事長として薬剤師生涯教育に、長崎大学薬学部、近畿大学薬学部・兵庫医療大学薬学部、愛知学院大学薬学部、名城大学薬学部などで薬学教育にも携わっている。